



企業での研究という選択肢

有村 英俊



皆さんはどのような想いを持って大学院に進学され、また研究をされているのでしょうか。大学院修士課程への進学があたりまえの時代にはなりましたが、博士課程へ進学する人はまだ数が多いとはいえません。また、進路となると博士課程の学生は選択肢も少ないのが現状だと思います。ここでは、私が博士号取得後に企業に入社した動機と、企業での研究で思うことを書きたいと思います。雑駁な話になることをご容赦下さい。

進路 ～大学か企業か～

私は関西大学で大内辰郎教授・大矢裕一准教授の指導の下、医用材料への応用を目指した乳酸系高分子の合成に関する研究を行っていました。ベースは高分子合成ですが、ターゲットがドラッグ・デリバリー・システムの素材や再生医療における吸収性足場材料だったので、高分子化学だけでなく、医学や生物学など幅広い分野を学ぶ機会を得ました。再生医療という、「細胞・吸収性足場・成長因子」の3点セットが重要であることはみなさんご存知だと思います。私が大学で研究していた頃はES細胞フィーバー真っ只中で、どの雑誌を見てもいかに分化を制御するのかということが最先端のトピックスであり、「論文はたくさん書けるけど、実用化という観点からすると遠いなあ」という印象を私は抱いていました。私自身は「研究を通して世の中に役立つカタチあるモノを送り出したい」という想いが強く、進路を考える上で企業への就職を重要視していました。

博士課程の学生の場合、進路の選択肢は限られているように思います。選択肢としては①大学教員の空きポストに入る、②ポスドクでスキルアップ、の2つが主であり、企業という選択肢は小さいかもしれません。しかし、「カタチあるモノを世に送り出したい」という想いが強い私は、大学でのスキルを活かせるということもありメーカーであるグンゼ株式会社を志望し、入社することができました。

企業での研究

みなさんが「グンゼ」と聞くと何をイメージされるでしょうか。メンズやレディースのインナーなどを思い浮かべるのではないのでしょうか。もちろん繊維製品はグン

ゼの主力製品ですが、実はそれだけではありません。包装用の高機能プラスチックフィルム、フッ素樹脂やポリイミドを利用したエンジニアリングプラスチック製品、タッチパネルなどの電子部品、そして、吸収性縫合糸や人工皮膚、吸収性骨接合材といった吸収性素材に特化した医療デバイスなど、幅広い分野に製品を提供しています。

私が所属している研究室では、主に医療デバイスの製品開発や生産現場の技術開発を行っています。ここでは企業での研究活動を行う中で学生時代にはなかった感覚をひとつ紹介したいと思います。

<プロダクトアウトとマーケットイン>

プロダクトアウトとは、研究から製品を考え出すことで、マーケットインは市場の要求を形にする研究と言えるかと思います。アカデミックでは、各研究室固有の技術を基に、教員の興味対象が研究テーマになっていると思います。論文執筆もグラント獲得も教員が描いている絵が基本です。企業の場合は「市場（お客）が何を求めているのか」と「自社の技術・戦略」、「他社の状況（既存品や特許などの知的財産）」などを考慮して研究テーマが選定されます。

どちらが正しいという話ではなく、研究を進める上ではどちらの視点も重要だと思います。最終的には「自分の強み・想い」と「相手の望むもの」がマッチングして初めて社会的意義のある研究ができるのだと思います。

博士課程の学生にとって、企業への就職は増えてはいるものの選択肢は限られており、まだまだ困難な時代だと思います。ただ、一度外にでて企業で研究してみると、アカデミックとは異なる研究面での難しさ・厳しさ（精度・安全性・納期・コストなど）を体験でき、「何が世の中に貢献できるのか」ということを考えるという感覚も身につくのではないのでしょうか。また、経営的な視点は企業に限らず今後どこで研究するにしても求められるものになっていくと思います。

企業で研究をしてみたいと思っている方の中でグンゼに興味がある方、また医療デバイスや再生医療に興味のある方はご一報下さればと思います。